



The Pragmatics Society of Japan
日本語用論学会

PSJ2017 CONFERENCE PROGRAM

第 20 回（2017 年度）大会

【発表要旨集】

- ABSTRACTS -

□12月16日（土）

20周年記念シンポジウム Special Symposium	2
研究発表1 General Sessions 1	4
张绍杰先生特別講義 Special Lecture	10
一般ワークショップ Workshops	11
基調講演1 Plenary 1	21

□12月17日（日）

研究発表2 General Sessions 2	21
ポスター発表 Poster Presentations	28
基調講演2 Plenary 2	32
東アジア特別国際シンポジウム	32
East Asian Special International Symposium	

20周年記念シンポジウム「語用論研究の広がり：語用論の関連分野からの提言」
/ Special Symposium (10:00~11:50) [60周年記念館1階記念ホール]

司会：鍋島 弘治朗（関西大学）

言語学の諸分野として一般に音声学、音韻論、形態論、意味論、統語論、語用論といった区分が挙げられますが、この区分の現状はどのようなものなのでしょうか。語用論は他分野にどのように貢献できるのか、そもそも語用論と他分野はどれくらい明確に分かれているのでしょうか、あるいはどの程度、どのように関連するのでしょうか。本シンポジウムでは、各分野の一線で活躍する講師の方をお迎えし、語用論とはどのような分野なのか、講師の方々の分野やご研究と語用論がどうかかわるかをご紹介いただくことによって、語用論の幅広さ、住み分け、今後の重要な方向性についてフロアの皆さんと共に検討したいと思います。

導 入	10:00-10:05	(5分)
第1講師	10:05-10:30	(25分)
第2講師	10:30-10:55	(25分)
第3講師	10:55-11:20	(25分)
休 憩	11:20-11:25	(5分)
全体討議	11:25-11:50	(25分)

● 意味論と語用論は近づいたか

松本 曜（国立国語研究所）

70年代に語用論の研究が活発化して以来、意味論と語用論の区別の基準として考えられていたのは、1)文脈からの独立した文と、文脈の中での発話の区別、2)意味の知識と世界の知識の区別などであった。また、その区別の背景には、能力か運用か、静態か動態かという言語学の範囲に関する議論や、規則か傾向か、合成的か非合成的かなど、言語観の対立があったと思われる。しかしながら特に認知意味論においてはこれらの区別は大きな意味を持たず、従来語用論の領域とされていた領域に意味論が入り込む形で意味論が発展してきたと言える。これは形式意味論の研究においても見られる傾向である。さらに認知言語学におけるここ10年ほどの「量的転換」により、意味論における証拠の扱いをコーパスや発話実験における使用頻度に求める傾向が顕著になり、意味論の立場からすると語用論との区別が不明確になって来たと言える。現在の研究の現状からすると、意味論と語用論は、どちらかがもう一方を含むとか、相補的な関係にあると言うよりも、部分的に重複している（重複し



ながら発展している) というのが正しいと言えるのではないか。意味論と語用論が近づいたかという観点からすると、意味論は語用論に近づいたとは言えると思われる(語用論が意味論に近づいたかどうかは分からない)。

● 民族音声学の夜明け

「現代日本語共通語には、しゃべり方が何種類あるのか? しゃべり分けられる態度が何種類あるのか? しゃべり方と態度の結びつきはどうなっているのか?」—この問いは、約20年前に私が或る音声情報処理研究者から受けた質問である。日本語発話行為論の中核を衝き、音声合成や対話システム開発の未来を大きく左右する、学問的にも社会的にも極めて重大なこの質問に、しかし誰がきちんと答えられるだろうか? 私自身も、解答の方針が固まったのがつい最近のことである。この講演では「口をとがらせる」話し方、「口をゆがめた」話し方、洋菓子屋の店先で若い女性の売り子が発する”twang”な発声法など、特に音声に関連する部分を取り上げる。イエルムスレウ的な「切り分け」論に反発し、エンフィールドの「民族文法」に心を寄せ、日常のコミュニケーションの観察とMRI調音動態撮像実験を組み合わせた「民族音声学」の試みを紹介したい。

定延 利之 (京都大学)



● 含意と推論の基盤を探る

この発表では、語用論研究の中心テーマのひとつである含意推論が実際の発話においていつ・どのように導きだされるかを扱う。特に(1)語用論と統語論はどのように役割を分担しているのか、(2)伝統的な母語話者の直感を手がかりとする研究方法と心理学的・脳(神経)科学的な実験を実施して結果を手がかりとする手法にはどのような長所短所があるのか、という2点に焦点をあてて、近年の研究動向を紹介しつつ検討する。

具体的な含意の例としては、数量含意と因果含意を扱う予定。統語論と語用論のお話はロンドン大学の須藤靖直さんと、後半の実験のお話は中国社会科学院のルオ・インイさんとの共同研究に多くを負っています。

酒井 弘 (早稲田大学)



研究発表 1/ General Sessions 1 (13:10~15:05)

● 第 1 室 [東 3 号館 K101 教室]

司会：久保 進（松山大学）

1. Condolences in English and Japanese: Implications for Politeness Theories

ITAKURA Hiroko (Hong Kong Baptist University)

The paper aims to identify parameters and cultural norms of linguistic variation in expressing condolences in English and Japanese and explores the role of speakers' knowledge of linguistic conventions and cultural norms in revising theories of politeness. For these purposes, the study compares linguistic expressions of condolences over the death of a mother and a pet in these languages by using Discourse Completion Tasks. The findings suggest that for both languages, the parameters for offering condolences include social distance between the bereaved and the deceased as well as the societal status of the deceased. However, cultural norms for offering condolences appear to vary across these languages, for example, with regard to the use of individualistic and other-oriented expressions. The paper concludes by exploring the theoretical implications by addressing the "East-West divide" (Leech, 2007) and the relevance of speakers' knowledge and politeness principles to more interactional approaches to politeness (Haugh, 2007).

References: (1) Haugh, M. 2007. "The Discursive Challenge to Politeness Research: An Interactional Alternative." *Journal of Politeness Research* 3(2), 317-395. (2) Leech, G. 2007 "Politeness: Is There an East-West Divide?" *Journal of Politeness Research* 3, 167-206.

● 第 2 室 [東 3 号館 K201 教室]

司会：岡本 雅史（立命館大学）

1. 疑問文発話の修辞性、アイロニー性、サーカズム

後藤 リサ（関西外国語大学）

疑問文発話の修辞性は、二つの話者態度、すなわち、話者のサーカズムとしてのアイロニー的態度と、疑問文発話の適切性条件に対するアイロニー的態度から説明が可能である。しかし、いくつかの先行研究においてはこれら二種のアイロニー性が混同されている (Gibbs 2000, Raeber 2016 等)。例えば Raeber (2016) は、話者態度としてのサーカズムが明白な発話をアイロニー疑問文と称しており、疑問文発話の誠実性条件に関するアイロニー性については何ら言及していない。本発表では、(a)疑問文の修辞性、(b)アイロニー性、(c)サーカズムの各概念についての関連性理論の枠組みを用いた筆者の見解を明示し、修辞疑問文発話理解の全貌を明らかにすることを試みる。

参考文献：(1) Gibbs, R. 2000. "Irony in Talk among friends." *Metaphor and Symbol* 15. 5-27. (2) Raeber, T. 2016. "Distinguishing rhetorical from ironical questions: A relevance-theoretic account." In M. P. Cruz (ed.) *Relevance theory: Recent developments, current challenges and future directions*. John Benjamins.

2. 高次表意で復元されるアイロニー発話の乖離的態度

盛田 有貴（奈良女子大学非常勤）

Wilson (2009) は、関連性理論 (Sperber and Wilson 1986/1995) の枠組みに基づき、アイロニー発話を帰属的 (attributive) かつ話し手の乖離的態度 (dissociative) の表明を伴うと定義付けている。本発表では、アイロニーの 2 つの定義特性のうち、乖離的態度に焦点を当て

る。具体的には、聞き手はアイロニー発話の理解の過程で、話し手が表明したと考えられる複数の態度を予測している実態を提示するとともに、このような乖離的態度の不特定性が、聞き手のアイロニー理解にどのような影響をもたらすのかについては、十分な議論がなされていないことを指摘する。本発表では以上の問題を踏まえ、アイロニー発話は、帰属元となる発話・思考の基本表意に対し、話し手の乖離性を保証するために、①乖離的態度は聞き手によって高次表意のレベルで復元される必要があり、②否定的要素をコード化する語を含んだ高次表意を復元するよう話し手は態度の表明を行う必要があることを明らかにすることを目的とする。

参考文献: (1) Sperber, Dan and Deirdre Wilson. 1986/1995. *Relevance: Communication and Cognition*. Oxford: Blackwell. (2) Wilson, Deirdre. 2009. "Irony and Metarepresentation." *UCL Working Papers in Linguistics* 21, 183-226.

3. 空耳と語呂合わせの暗記法：語用論的音韻拡張の観点から

塩田 英子（龍谷大学）

本発表では、Sperber & Wilson(1995)以降、広く実践されてきた関連性理論の枠組みを応用し、語呂合わせによる暗記法の表現構造と認知効果を分析する。対象となるのは、日本語の語呂合わせの中でも、音声の類似性を利用した暗記法である。まず、この種の語呂合わせを、(1)文字転写(transliteration)、(2)頭文字からの類推(analogy)、(3)民間語源(folk etymology)の3つに分類する。そして、これらが、空耳という、音声面での誤解を逆に利用して成り立つという側面を確認する。その上で、これらの表現の構造が、どのようにして関連性の達成に貢献するのかについて、3つの仮説を立てて検証する。その際、語用論的音韻拡張という概念を導入し、語呂合わせが成り立つためには、音韻的操作に加えて、語用論的な拡張も関わっていることを指摘する。また、アドホック概念形成と一義化という2つの語用論的プロセスの連続性についても言及し、当該事象を語用論的現象として扱う妥当性を示す。

参考文献：(1) Sperber, D. and D. Wilson. 1995. *Relevance: Communication and Cognition* (2nd edition). Oxford: Blackwell. (2) Aitchison, J. 2012. *Words in the Mind: An Introduction to the Mental Lexicon* (4th edition). Wiley-Blackwell. (3) 中野弘三編. 2017. 『語はなぜ多義になるのか』. 東京.

● 第3室 [東3号館 K202 教室]

司会：許明子（筑波大学）

1. インターネット掲示板における「常識」の正当化ストラテジー

ジャンカーラ・ウンサーシュッツ（大正大学）

本研究では、Reyes (2011) を参考に、「常識」という表現が電子掲示板の発言小町で正当化の談話ストラテジーとしていかに機能するのかを分析する。電子掲示板では、他利用者の背景等が不明という大前提でやり取りが行われるが、「常識」への訴えが個人の特徴によらないため、正当化のストラテジーとして効果的だと予測できる。一方、ストラテジーが成功しない場合、「常識」の確認交渉が行われると考えられる。このことを踏まえ、本研究では投稿の詳細なディスコース分析を実施し、「常識」の正当化ストラテジーが、「常識」の概念の再交渉にどのような影響を及ぼすのかを究明する。対象投稿の分析の結果、「非常識」と比べ、「常識」を訴えかけることが、必ずしも概念の再交渉の引き金に

なれず、戦略だということに気付かれずに済むことが明らかになった。

参考文献：Reyes, A. 2011. “Strategies of legitimization in political discourse: From words to actions.” *Discourse & Society*, 22(6): 781–807.

2. 日韓政治ディスコースにみられる正当化の戦略 —社会・政治的背景と言語的特徴の関係を中心に—

韓娥凜（大阪大学大学院生）

本発表では、日本と韓国の政治ディスコースを取り上げ、その中にみられる正当化の戦略を社会・政治的背景と結び付けて考察する。具体的には、政治選挙の場面で必然的に発生する「対立関係」に注目し、日韓の選挙演説に共通してみられる話題とそれを展開する際に用いられる正当化の戦略を考察した。分析の結果、日本の政治家は政策運用上の責任追及や具体的な数値の列挙および引用から自分の発言を「権威化」することによって正当化を図る傾向が強いことが分かった。一方、韓国ではイデオロギー的価値を重んじた「倫理的評価」による正当化の戦略を積極的に用いるなど、日韓で異なる結果が得られた。このことから「説得」という同じ目的を持つ政治ディスコースであっても具体的な正当化の戦略の運用には異なりがあることが明らかになった。

3. 語彙的評価語の否定における規範的偏向：“Barack Obama is the first black president of the US” の両義性をめぐって

大久保朝憲（関西大学）

本発表でとりあげる規範的偏向 *normative bias* とは、good, clean のような優位の規範的評価語が否定されると (not good, not clean)、それぞれの反意語 (bad, dirty) にちかい意味をもつ傾向があるが、劣位の規範的評価語の否定 (not bad, not dirty) においてはそうはならないというものである。black/white という対義語のペアは、色彩語彙としては中立だが、人種語彙としては規範的偏向をしめし、オバマ氏を black president と表現する背景には、not white → black という規範的偏向があり、これが white：優位、black：劣位という意味づけをうらづけている。他方でオバマを black president と表現する傾向は、黒人当事者において顕著とされ、本研究では、これを理解・記述するために、語彙的意味をはなれた規範的評価性を考慮にいたした分析をこころみる。

参考文献：(1) Ducrot, Oswald. 1973. *La preuve et le dire : langage et logique*. Paris : Mame. (2) 大久保朝憲. 2016. 「アイロニー・からかい・緩叙法・婉曲語法」『フランス語学の最前線 4』（東郷・春木（編）），303-339, 東京, ひつじ書房.

● 第4室 [東3号館 K203 教室]

司会：小野寺典子（青山学院大学）

1. 日本語とスンダ語の断り談話における言語行動の分析 —断りに至るまでの過程を中心に—

ノフィア・ハヤティ（金沢大学大学院生）

断りが成立する前の段階では断りの意図を伝える際、相手のフェイスを脅かすリスクを緩和するための言語行動が行われることがある。しかし、断り談話をいくつかの過程に分け、過程ごとの言語行動に着目した研究は少ない。本研究では日本語母語話者（JNS）とスンダ語母語話者（SNS）は断りに至るまでの段階においてどのような言語行動がなされるのかを意味公式という枠組みを用いて明らかにする。分析の結果、JNS と SNS 間に顕著な差

が見られた。SNS は断りに至るまでの間になされる言語行動が JNS より多いことから、依頼を受けても直ちに断り意図を伝えようとしない傾向があることが分かった。また、断りに至るまでの言語行動に見られる意味公式の特徴として、JNS は消極的な行動である【ためらい】を、SNS は主に積極的な行動である【情報要求】を、それと同時に消極的な行動である【困惑】も使用する傾向が見られた。

参考文献：(1) 吉田好美. 2015. 勧誘に対する断り研究：日本語母語話者とマナド語母語話者 お茶の水女子大学大学院博士論文。(2) Beebe, L., et al. 1990. “Pragmatic Transfer in ESL Refusals.” In R. Scarcella, E. Andersen, & S. Krashen (Eds.), *Developing Communicative Competence in a Second Language*. New York: Newbury House, 55-73.

2. 若年層のタイ語話者による人称詞の使用

松江夏津紀（奈良工業高等専門学校）

本発表では、若年層のタイ語話者が話しことばにおいてどのような「自称詞」と「対称詞」（鈴木 1973）を使用し、どのような基準より人称詞の選択を行っているのかについて論じる。タイ語母語話者の会話、テレビドラマからのデータ、及びタイ語母語話者へのアンケート調査と聞き取り調査から、現代タイ語の自称詞と対称詞の使用法の実態を把握し、その使用法を分析する。タイ語の人称詞について Iwasaki & Ingkaphirom (2000) が示した堅苦しさのスケールを踏まえ、タイ語では話者と対話者の性別、性格、家庭背景、周辺環境に加え、「階級スケール」、「親密度スケール」、「堅苦しさスケール」の 3 つの異なった決定要因により人称詞の選択が行われるという点を明らかにする。

参考文献：(1) Iwasaki, Shoichi. and Preeya Ingkaphirom Horie. 2000. “Creating Speech Register in Thai Conversation.” *Language in Society* 29, 519-554. (2) Voravudhi, Chirasombutti. 1995. *Self-Reference in Japanese and Thai: A Comparative Study*. Ph.D. diss., Canberra: Australian National University.

3. World Englishes に関するコーパス言語学的研究：GloWbE を用いた法助動詞の事例研究 中村文紀（北里大学）

本発表の目的は、世界で話される英語変種 World Englishes をコーパス言語学の手法で分類することである。英語変種は数多くあるが、英語学研究（特に理論系）で用いられる変種は従来の英語変種（例えばイギリス英語やアメリカ英語）に偏っており、これらの世界英語における位置付けが議論されることは少ない。データは、Corpus of Web-based Global English（以下 GloWbE）から採り、手法は Gries and Otani (2009) 等で開発された Behavioural Profiles を応用した。分析対象は GloWbE にある 20 変種であり、分類するための要因として can や must など（準）法助動詞 15 個の 100 万語あたりの頻度を用いた。分析の結果、有意なカテゴリーが三つあった。一つはイギリス、アメリカを含む従来のアングロサクソン変種、二つ目はシンガポールやインドを含むアジア英語、そして最後にガーナや南アフリカを含むアフリカ英語である。また、アングロサクソン変種は would や could 等の仮定法に特徴があり、アジア英語は can などが特に関係している可能性が示唆された。

参考文献：Gries, Stefan, and Naoki Otani. 2010. “Behavioral profiles: A corpus-based perspective on synonymy and antonymy”. *ICAME-Journal* 34: 121-150.

● 第5室 [東3号館 K301 教室]

司会：木山幸子（東北大学）

1. ポライトネスと利害・関心：社会関係資本としてのママ友に注目して

大塚生子（大阪工業大学）、柳田亮吾（大阪大学）

本発表ではママ友間のメールでの対立場面について、その相互行為に見られるイン／ポライトネス現象に話し手と聞き手のどのような利害・関心が埋め込まれているのか、社会関係資本（Lin, 2001）の保持という観点から考察を行う。

ポジショニング（Davies&Harré, 1990 等）の観点からの談話分析により、彼女らは相手に対する批判的・対立的発言を行う際に、攻撃の意図が明示的ではないオフレコード・インポライトネス・ストラテジーをしばしば用いていることが明らかになった。形式面では、事態の重大さへの配慮、謝罪、攻撃の程度によって文末表現を常体／敬体の間でシフトさせ、「加害者-被害者」や「ママ友同士」など目的に応じたポジショニング・シフトを行っていた。

このような対立方法及び最終的な対立の収束は、自分たち、また子どもたちの今後の良好な関係の維持に動機づけられており、イン／ポライトネスの実践は社会関係資本を維持するための一つの方法といえる。

参考文献：Davies, B. and R. Harré 1990, 'Positioning: The discursive production of selves', *Journal for the Theory of Social Behaviour*, 20(1), pp. 44-63. / Lin, N (2001) *Social capital: A theory of social structure and action*, New York: Cambridge University Press.

2. ブラジル在住日系ブラジル人と日本人における表現の丁寧度—依頼行動を日本語で遂行する際—

小野和信（京都外国語大学院生）

ブラジルには世界最大の日系社会があり、日本語を話せる人が多く存在する。これまで、ブラジルで話されている日本語の研究は行われてきたが、ほとんどの研究は意味論や統合論の観点から分析されていた。本稿では、日系ブラジル人と日本人が日本語で依頼行動を遂行する際に用いる表現の丁寧度に着目した。依頼の際、話者は自分の利益になる行為を相手に求めるので、相手に負担をかけてしまう。そのため、社会的なしきたりの認識が異なると、話者が用いる表現の丁寧度も異なる。本稿は、関西とサンパウロ州でアンケート調査を行った。その結果、場面の負担度が高くなると日系ブラジル人が不適切な表現を多く用いた。また、場面の負担度が異なっても同じ丁寧度の表現が頻繁に使用されていたので、日系ブラジル人の敬語行動が簡略化している。つまり、日本人と日系ブラジル人の敬語行動に対する意識が異なり、前者が強い意識を持っているが、後者の意識が薄い。

参考文献：(1) 井出祥子, 他.1986.『日本人とアメリカ人の敬語行動』南雲堂.(2) 蒲谷宏・坂本恵・川口一義.1998.『敬語表現』大修館書店.(3) Brown, Penelope, & Levinson, Stephen C.1987. "Politeness : Some Universals in Language Usage." London: Cambridge. University Press.

3. ベネファクティブ「させていただく」という問題系—質問紙調査とコーパス調査より— 椎名美智（法政大学）

本発表の主眼は、現代日本語のベネファクティブの一形式「させていただく」を問題系として捉え、質問紙調査とコーパス調査の結果を歴史語用論とポライトネス理論の観点から考察し、「新丁寧語」としての使用拡大と語用論的機能の衰退という二面性を浮き彫りに

することにある。「させていただく」の許容条件の範囲と違和感の度合いを探る質問紙調査からは、「させていただく」の意味が漂白化しつつあり「文法化」が起こっていることがわかった。コーパス調査では、他のベネファクティブと比較した結果、「させていただく」は、前接部では相手との関わりを示す動詞が多様化する一方で、相手と交渉的スピーチアクトを担う後接部ではモダリティ表現の単純化と、言い切り表現の増加が見られた。これらの調査結果から、近年の「させていただく」の使用拡大は語用論的ストラテジーの衰退と意味論的ストラテジーへの依存の現れと言えるのではないかと結論づけている。

参考文献：(1)金澤裕之. 2007. 『～てくださる』と『～ていただく』について『日本語の研究』3(2), 47-53. (2)滝浦真人. 2016. 「社会語用論」、加藤重広・滝浦真人（編）『語用論研究法ガイドブック』、77-103、ひつじ書房. Leech, G. 2014. *The Pragmatics of Politeness*. Oxford: Oxford University Press.

● 第6室 [東3号館 K302 教室]

司会：井出里咲子（筑波大学）

1. Rapport-oriented vs. Stance-oriented Backchannel Sequences in ELF Interactions IKE Saya (Sugiyama Jogakuen University) Jean MULDER (University of Melbourne)

Our ongoing study of backchannel (BC) behaviour in English spoken by Japanese (JE) and English spoken by Australians (AusE) has identified differences in the range and distribution of functional phases in backchannel sequences—BC instances involving more than one exchange of BCs—as well as in frequency, preferred backchannel types, sequential location, and initiation strategies (e.g., Ike, 2016). Notably, in JE interactions extended BC sequences are frequent, often used to negotiate turns, and predominately rapport-oriented, whereas in AusE interactions extended BC sequences are relatively infrequent and more stance-oriented (Ike & Mulder, 2016). This paper focuses on how JE speakers negotiate their rapport-oriented BC behaviour in initiating an extended BC sequence, and how they accommodate and their pragmatic expectations in the absence of extended BC sequences and differences in rapport-orientation in interactions with AusE speakers. As such, it provides further insight into the pragmatic accommodation accomplished by speakers in ELF settings.

References: (1) Ike, S. (2016). The interactional basis of backchannel behaviour in Japanese English. *Journal of Sugiyama Jogakuen University: Humanities*, 47, 129-138. (2) Ike, S., & Mulder, J. (2016). Building rapport and negotiation turns (or not) through backchannels. Paper presented at the 19th Annual Conference of the Pragmatics Society of Japan, Shimonoseki.

2. What kinds of segmental repair are most frequent in English as a Lingua Franca Interactions in Japan?

George O' NEAL (Niigata University)

This presentation will describe a qualitative and quantitative study of segmental repairs that maintain mutual intelligibility in English as a Lingua Franca interactions (O'Neal 2015, 2016). Using conversation analytic methodology to examine a corpus of miscommunications among Chinese and Japanese students at a Japanese university, this study identifies the segmental repairs and adjustments in a corpus of several hours of oral English communications between Japanese students and exchange students so as to measure which segmental repair and adjustments are most frequent. On the basis of the analysis, this study claims that four segmental repair strategies and three segmental adjustments are used in the interactions to maintain mutually intelligible pronunciation and that reactive segmental repair and segmental modification are the most frequent.

References: (1) O'Neal, G. (2015). Segmental repair and interactional intelligibility. *Journal of Pragmatics*, 85, 122-134. (2) O'Neal, G. (2016). Intelligibility and Segmental Phoneme Repair Strategies in English as a Lingua Franca Interactions among Chinese and Japanese Speakers of English. *Chinese Journal of Applied Linguistics*, 39(4), 379-400.

3. The bars were closed until Monday. 一月曜日は営業なのか休業なのか?
明日誠一 (青山学院大学非常勤)

张绍杰先生特別講義 Special Lecture (13:50~15:05) [東 3 号館 K101 教室]

Chair: KUBO Susumu (Matsuyama University)

● Culture-specific Face in Chinese

ZHANG Shaojie (Northeast Normal University, China)

Key words: face; mianzi; lian; culture-specificity; Chinese

Face, like politeness, is a universal phenomenon, but it is culture-specific to a greater extent across cultures. Face and politeness are two distinctive notions in Chinese in contrast to those in English cultures where face is taken as a communicative goal and politeness as a general strategy for achieving that goal when face encounters threat in interaction. This study focuses on the culture-specific aspects of face realized by mianzi and lian in Chinese supported by a corpus-based data. The findings reveal five aspects. First, face represents a system of value constructs with mianzi being more associated with public self-image as the most salient value, and lian being more associated with morality as the most dominant value. Second, face is represented at the individual, relational and collective levels with mianzi representing more socio-cultural face and lian representing more individual face. Third, face claim is a matter of value judgment or evaluation, with mianzi being more positively evaluated and lian more negatively evaluated. Fourth, face representation tends to be involved in self-other interaction with mianzi being more other-related in a social sense and lian being more self-oriented in a personal sense. Lastly, face operates as a whole with mianzi and lian coexisting and interdependent in social interaction, but there is a large proportion of overlap between the value constructs of mianzi and lian which interact with one another to determine face maintenance, face gain, face loss, or even face hurt and damage in Chinese culture.



一般ワークショップ / Workshops (15:10~16:40)

● 第1室 [東3号館 K101 教室]

場の語用論の試み—日本語のインテュイションに基づく解釈

オーガナイザー：植野 貴志子 (順天堂大学)

本ワークショップは、人間存在の基体としての「場」から言語・言語使用の諸相を捉える場の言語学を提起し、試行するものである。人間存在の基体としての場とは、主体が成り立つところの無意識、身体、場面、共同体、自然など様々なレベルを含む。

従来の語用論の理論化はデカルト的な理性的言語観に基づいて個の推論、認識を中心に行われ、場の問題は捨象されてきた。場の言語学は、従来の語用論理論を補完し、より普遍的な理論構築に貢献する。

各発表者は言語・言語使用には文化が刻印されているという見地に立ち、他言語との比較から顕在化する日本語の語用論的特徴について母語話者視点による解釈を行ってきた (井出・藤井 2014)。本ワークショップでは、場こそが母語のインテュイションの基であるという仮定のもと、4件の発表とディスカッサントを交えての議論を行う。

1. 日英語の比較から見る「場」と日本語の諸相

藤井 洋子 (日本女子大学)

日本語は「場」を中心に展開される言語であり、「主体」を中心に展開される英語とは大きく異なる様相を示す。本研究では「場」的思考の特徴である以下の四点を中心に、日本語の文構造や語法、発話行為などを概観し、「場」から主体を抽出する構造としての述語主義という視点で日本語を捉え直す試論を展開する。取り挙げる「場」的思考の特徴の第一は、「場」からの自己規定である。自己は場に存する他者や周囲の環境との関わりから特定され、規定されていく。第二は、場全体を見る全体把握的、状況把握的事象の捉え方であり、これと関連して第三に、場での事象を内在的な視点で捉えていくことである。最後に、場に共在する自己と他者の融合性が高いため、他者との関係性により自己を捉えていく他者志向性を挙げる。発表ではできるだけ多くの事例を提示しつつ、日本語がいか

かに述語主義的言語であるかということを経験と英語との比較を用いながら例証していく。
参考文献：(1) 藤井洋子. 2016. 「日本人のコミュニケーションにおける自己観と「場」— 課題達成談話と人称詞転用の分析より—」藤井洋子・高梨博子 (編) 『コミュニケーションのダイナミズム— 自然発話データから—』1-38. ひつじ書房. (2) 城戸雪照. 2003. 『場所の哲学』文芸社

2. 「場」の語用論と文法の接点：日韓語のスピーチレベルの対比を通じて

堀江 薫 (名古屋大学)

日本語と韓国語は、話し手と聞き手が共創的に作り上げていく「場」における上下関係、改まりの度合い、ネガティブ・ポジティブポライトネスの指標としてスピーチレベルという文法形式が整備されている (日本語は「普通体」「丁寧体」の2段階；韓国語は Plain/intimate/Familiar (非丁寧体) および Authoritative/Polite/Deferential (丁寧体) の6段階)。

スピーチレベルが語用論的な伝達上の慣習に留まらず文法体系として確立していることは、「場」という創発的・動的な現象が日韓語の言語、コミュニケーションに如何に大きなインパクトを与えているかを明瞭に示している。

本研究は、日韓語のスピーチレベル現象の対比を通じて、文法構造への「場」のいわば「浸透圧」において、日本語は韓国語よりも相対的に高いという相違が見られることを指摘する。具体的には、韓国語ではスピーチレベル形式およびその交替（シフト）は主節にしか見られないのに対して、日本語は主節のみならず従属節においても広く観察される。

参考文献：(1) Ono, Tsuyoshi, and Kimberly Jones. (eds.) 2008. *Style Shifting in Japanese*. Amsterdam: John Benjamins. (2) 堀江薫. 2014. 「主節と従属節の相互機能拡張現象と通言語的非対称性」益岡隆志ほか（編）『日本語複文構文の研究』, 673-694. ひつじ書房

3. 教師と学生の相補的關係性における役割志向の発話—自己の二領域性のはたらき

植野 貴志子（順天堂大学）

初対面の教師と学生の会話では、各々の役割期待が瞬時に相互了解され、疑似親子的な感情を帯びた発話行動が相補的になされる。本研究では、それが可能になる仕組みを「自己の二領域性」（清水 2003）に基づいて解釈する。

自己の二領域性とは、自己は理性を担う自己的領域の周囲に感性を担う場所的領域をもつとする考えである。他者と共有可能な主観的領域である場所的領域は、感情の共同性、習慣性、さらには感情の型を生み、それが諸関係の集約と連関しつつ秩序、即ち「場」を生成する。教師と学生の役割志向の発話は場に合致してなされるものと解釈される。

参考文献：(1) 清水博. 2003. 『場の思想』東京大学出版会. (2) 中村雄二郎. 1997. 『感性の覚醒』岩波書店. (3) 植野貴志子. 2014. 「問いかけ発話に見られる日本人の先生と学生の社会的関係—日英語の対照を通して—」井出祥子・藤井洋子（編）『解放的語用論への挑戦』, 91-122. くろしお出版

4. 対話による場の共創：確認表現の使用と主導

片桐 恭弘（公立はこだて未来大学）

言語行為理論では、話し手の意図的発話を通じて情報・意図の共有が実現されると捉える。それに対して場の語用論では、話し手と聞き手とが物理的・心理的な「場」に共在することが共有基盤となる。対話参加者は「場」が規定する適切な振る舞いを「わきまえ」ることによって各自の行動を選択する。発話は場のわきまえによって規定されるだけでなく、場自体を動的に変化させる。

社会的地位に依存して適切な発話行動の変わる言語では場のわきまへの結果として社会的地位の相違に基づく様々な発話行為の相違が観察される。対話進行は通常上位者が主導することが想定される。日本語の「よね」あるいは中国語の「是吧」は文末に用いられると、話し手の提示する情報を聞き手が受容するかどうか確認を要求する表現となる。このような確認要求も通常上位者が主に行うことが想定される。

日本語および中国語の共同物語構築の合意形成対話における確認表現使用と主導の様態の分析に基づいて場の共創の概念を提示する。

● 第2室 [東3号館 K201 教室]

動的語用論の構築に向けて—共通基盤化(grounding)の実際を例証する—

オーガナイザー：田中廣明（京都工芸繊維大学）

本ワークショップでは、「動的語用論」の立場から「共通基盤化(grounding)」(話し手が呈示した発話が、聞き手に理解でき、対話者間の共通基盤の一部として確立した場合)を検証する(Clark and Brenann 1991; Clark 1996: 221)。

発話は、対話者間で様々な交渉が行われ、動きが多い。従来の語用論は、発話の一場面の理論化に重きが置かれたため、発話の「動的」な面が重視されてこなかった。Arundale(2008)は、それを固定した dogma (教義) と呼び、発話の動的な特徴を挙げている：(i) 対話者の心理状態は同一ではない。(ii) 隣接する発話は連続性があり相互依存する。(iii) 意味・行為は未解決から最適なものに進化する。(iv) 発話は、一方向ではなく、先取りと遡及がある。(v) 対話者の意味・行為は「創発(emergent)」する。

ここでは上記、(ii)(iii)(v)を中心に、対話者の共同行為を通して、共通基盤化が生じる過程を、次の1から4の局面を設定し検証する。

Phase 1：話し手の自己中心的な (egocentric) な局面 (エラーが起こりやすく、相手の知識を過大・過小に評価する)。

Phase 2：聞き手による修復や指示対象の検索が行われる局面。

Phase 3：話し手が聞き手デザインを駆使し、聞き手が推論・連想によって共同構築が行われる局面。

Phase 4：最終局面。

全体に、相手が推論してくれるであろうという「見込み(presumption)」があることが観察された。

1. 「指示解決(reference resolution)に見られる自己中心性(egocentricity)と共通基盤化」

田中廣明 (京都工芸繊維大学)

聞き手に初めて指示対象 (固有名など) を導入する際の解決法 (共通基盤化) を考察する。(i) 聞き手が最後まで指示対象が分からない場合、(ii) 途中で分かった場合、(iii) 最初から分かっている場合に分ける。この順で話し手の自己中心性の度合いは減るはずだが、(i)でも、話し手は文脈から自己中心的になってもよいという合図が示され、聞き手の認知的負担度は軽減される。特に日本語では「Xという(って)」の「引用詞」が、聞き手の負担軽減に大きな役割を果たす。自己中心的な局面にも共通基盤化の合図が埋め込まれることを主張する。

2. 「学習者と母語話者の共同行為(joint action)：課題達成場面における共通基盤化」

吉田悦子 (三重大学)

本発表の目的は、英語学習者と英語母語話者が課題達成場面でおこなう相互行為を分析し、情報の不均衡さを解消するために、どのような基盤化形成の方略が展開されているかを明らかにする。とりわけ、パターン化した定型表現を含む構文を多用する母語話者に対して、学習者には、反復やりペアなど、情報共有を相互にモニタリングして調整するためのさまざまな働きかけの応酬が観察される。さらに、発話の冒頭や修復場面で顕著に見られるジェスチャーの同期や、ターンの頻繁な交替により情報が精緻化されていくプロセスを、動的な語用論的分析によって解明することができる。

3. 「タスク達成場面における共同行為—折り紙製作場面を事例に」

秦かおり (大阪大学)

本発表は、お互いの知識に差がある不均衡状態の参加者が互いの知識を教え合いながら最終的に一つのタスクを達成するというタスク遂行場面を、共通基盤化の観点から分析する。実験場面では expert と novice の役割分担を明確に設定することがあるが、日常の中では必ずしもその境目は明瞭ではない。X という意味内容を言語・非言語行動によって X であると共有する過程は、phase1 から 4(Clark 1996)において、話し手と聞き手が互いの立場を交替させながら知識の断片を提供し合い達成へと導くものである。本発表では一例として、

大人と子供の折り紙製作場面を挙げ、お互いの「見込み(presumption)」を修正しながら本の解説を正しく理解し折り紙を製作していくという共同行為を分析し、その過程で生起する様々な語用論的特徴を分析することで、参与者同士が何を以って共通基盤化が達成されたと理解するのかを明らかにする。

4. 「動的語用論から見た日本語のスタイルシフトの共通基盤化—丁寧体と常体の交換の例」

山口征孝（神戸市外国語大学）

本発表では（ii）相互依存性と（v）創発性に主に注目しながら共通基盤化現象を見る。具体的にはミスターオーコーパスから学生と先生の「びっくりした話」を主題とした会話を分析する。本稿の主張は、日本語における丁寧体と常体の交換は「自己中心性」（個人的方略）と社会的規範からなされる「見込み（presumption）」の両面から説明しなければならない、という点である。分析結果として、他者の言葉や思考を引用する際、丁寧体が常体に変化した。今後の研究の方向性として、文レベルで行われる「静的語用論」から相互依存性と創発性を概念化できる「動的語用論」への移行の必要性である。

● 第3室 [東3号館 K202 教室]

認知語用論に基づくナラティブ・リアリティの解明に向けて—語りの構造化・共話・反復から見えること

オーガナイザー：仲本康一郎（山梨大学）

本ワークショップの目的は、どのような心のメカニズムによって物語が生成されるのかを認知語用論の観点から考察することにある。従来までの研究では、物語の展開や談話理解を支える知識構造を考察するものが多かったが、本研究では、人が「語る」という行為によって物語を生成するという見解に立ち、動的なプロセスにおいてナラティブ・リアリティがどう構築されていくかを探究する。

個別発表では、（i）語りが時間標識や意図標識など、さまざまな物語標識によって「構造化」されること、（ii）単一の物語が複数の話者によって「共話的」に語られうること、（iii）同一の物語が何度も「反復的」に語られることで表層的な変容を受けつつ同一性を保持することに着目し、語りの展開可能性、共話可能性、反復可能性を架橋するナラティブの認知メカニズムを考察する。

1. 物語標識——「語り」の展開を標示する言語表現

仲本康一郎（山梨大学）

第一発表では、「語り」の展開を標示する「物語標識」に着目し、その背後で働く認知的営みを分析することで、物語がどのような心のメカニズムによって生み出されるかを考察する。具体的には、「やっと」「とうとう」「結局」といった時間的展開を表わす表現、「つい」「あやうく」「せっかく」といった主体の意志に関する表現等——物語標識に注目し、これらの表現を支える認知メカニズムを「心の理論」によって分析する。

本発表は、語ることによって出来事ははじめて意味づけられるという（社会）構成主義の観点に立つ。例えば、「髪を切る」という事実は同じであっても、「やっと髪を切ることができた」という場合は計画の《成就》を表わすのに対して、「あやうく髪を切るところだった」という場合は《被害》として認識される。本発表では、このような物語標識によって明示化される意味を物語的意味と呼び、それらを語用論的に記述する枠組みを提案する。

参考文献：子安増生 2000. 『心の理論』東京：岩波書店. ; K. J. Gergen 1999. *An Invitation to Social Construction*. London: Sage Publications Ltd. (東村知子 (訳) 2004 『あなたへの社会構成主義』京都：ナカニシヤ出版.)

2. テキストの対話変換実験に基づくナラティブの共話可能性の検討

岡本雅史 (立命館大学)

第二発表では、大学の授業内で行った、単独の著者による短い学術エッセイの内容を二人間の対話形式 (オープンコミュニケーション) によって話し言葉で書き換えるという対話変換実験を通じて、単一の話内容がどのように複数の話者によって共話的に伝えられるのかを分析し、ナラティブの共話可能性を検討する。

不特定の読者を受け手とする「語り」の一種であるエッセイを二人間の対話形式で変換する試みは、その「語り」の何を中心として維持し、何を周縁として省略しようとするのかという変換者自身の物語認知プロセスを反映しつつ、仮想的な登場人物と場面の設定、さらには各々の話者のスタンス設定などの表現様式の選択に基づく様々な変異体を生ずる。本発表では、こうした同一の「語り」が複数の仮想的な対話場面へと変異することを可能にする潜在的構造を《ナラティブ・リアリティ》と呼び、その構造・機能的特徴の解明を目指す。

参考文献：岡本雅史 他 2008. 対話型教示エージェントモデル構築に向けた漫才対話のマルチモーダル分析, 『知能と情報』, 20(4): 526-539.; Du Bois, J. 2007. Stance triangle. In: R. Englebretson (ed.), *Stancetaking in Discourse*, Amsterdam / Philadelphia: John Benjamins, 139-182.; Goodwin, C. 2007. Participation, stance and affect in the organization of activities. *Discourse & Society* 18(1): 53-73.

3. 物語の反復に見る物語の可変的要素と根幹要素

加藤祥 (国立国語研究所)

第三発表は、物語が「反復」されるという側面に着目した報告を行う。同じ物語が繰り返されて生成されるのはすべてが等しい物語の集合ではない。構成や表現、文体など、様々なレベル (例: Thorndyke, P. W., 1977) の変容が観察される。そこで、物語に不変の部分と変化する部分、あるいは部分的な変容と全体的な変容の相違を調査し、物語における可変的要素と根幹的要素を明らかにすることを試みる。被験者実験によって、同一人物の繰り返した物語と複数人が語る (ことで繰り返された) 物語を収集し、不変的要素と可変的要素を分析した。また、どのような部分が物語の構成に影響を及ぼすのか、「同じ」物語の類似度判断実験によって考察した。これらの結果、(i) 個々の出来事や物語の展開、結末は可変であること、(ii) 登場人物の人間関係は不変であること、(iii) 物語展開の中心的出来事と因果関係は不変であることを示す。

参考文献：Thorndyke, P. W. 1977. "Cognitive structures in comprehension and memory of narrative discourse." *Cognitive Psychology* 9: 77-110.

● 第4室 [東3号館 K203 教室]

新規表現の語用論に対する多角的アプローチ

オーガナイザー：-西村綾夏 (京都大学院生)

本ワークショップの狙いは、書き言葉を中心に見られる新規表現に対する、様々な視点からの分析方法の提案である。近年ではメディアの発展に伴い「話し言葉的な書き言葉」が増加すると共に、そこで生まれる「新規表現」も既存の表現と住み分けながら多様な変

化を遂げている。これらは従来の統語論や意味論からは逸脱的・例外的な現象になる。しかし語用論的な立場から分析すると、そこには使用者の態度や対人意識が反映されており、独自の規範を形成していることが指摘できる。

そこで本ワークショップでは、新規表現がコミュニケーションにおいて果たす役割に着目し、多角的なアプローチからの分析を提示する。第一発表では日本語における「キャラコピュラ」、第二発表では丸括弧表現の空用法 (null-parenthesis)、第三発表ではインターネットスラングに見られる「笑い」表現を扱う。後半ではフロアを交えた全体討論を行う。

1. これもコピュラ「じゃ」ろうか?—日本語におけるキャラコピュラの意味論・語用論

井原駿 (大阪大学院生/日本学術振興会)

本研究では、日本語における「キャラコピュラ」の振る舞いを語用論・意味論的観点から考察する。キャラコピュラはコピュラ「だ」の変異体であり、その意味はコピュラの意味に「発話キャラクターを表出する意味」が備わったものであるとされる (定延 2007)。キャラコピュラの統語的生起位置や用法は通常のコピュラと殆ど同様であるが、実際には、両者は間接埋込文等において異なる文法的振る舞いを見せる。この差異に対する分析として、本研究では (i) 統語的アプローチと (ii) 語用論・意味論的アプローチの可能性を提示し、キャラコピュラの分析にあたり有用なのは (ii) のアプローチであることを示す。さらに、キャラコピュラの持つ 2 つの意味—コピュラの意味と発話キャラクターの意味—は異なるレベルの意味であることを主張する。これにより、キャラコピュラの振る舞いを経験的・理論的に正しく予測できることを示す。

参考文献 : [1] Grice, H.P. 1975. "Logic and Conversation." In Cole, P. and J. Morgan (eds.) *Syntax and Semantics 3: Speech Acts*, 43–58. New York: Academic Press. [2] 定延 利之. 2007. 「キャラ助詞が現れる環境」, 金水敏 (編) 『役割語研究の地平』, 27–48, 東京: くろしお出版.

2. 内部に語句を伴わない丸括弧表現の空用法について

板垣浩正 (大阪大学院生)

本研究は、インターネットスラングとして知られる丸括弧内に語句が生じない用法 (e.g. 「あいつ、天才 () だよな」) を丸括弧表現の空用法 (null-parenthesis) と呼び、その意味的・機能的特徴を二種類の解釈によって統一的に説明できることを示す。一つ目は、<直前の語句に関する属性に対して書き手の冷笑的態度を示す用法>である (e.g. 「優しい人 () だな」)。二つ目は、<書き手の不足事項に対し読み手に冷笑的態度を要求する自虐的用法>である。例えば「もう宿題あきらめた ()」ならば、「愚かなことだと思って欲しいのだが、私はもう宿題をあきらめた」とパラフレーズできる。

さらに本研究は、これら二つの解釈が日本語の文法規則に沿った意味的特性を有しているだけでなく、間主観性 (Intersubjectification; Traugott 2003) によって関連付けられることを主張する。

参考文献 : [1] Traugott, Elizabeth Closs. 2003. "From subjectification to intersubjectification." In Hickey, Raymond (ed), *Motives for Language Change*. 124–140. Cambridge: Cambridge University Press.

3. 書き言葉の感情表現-インターネットスラングに見られる「笑い」-

西村 綾夏 (京都大学大学院)

黒田 一平 (京都ノートルダム女子大学/龍谷大学非常勤講師)

本発表では、近年ネット上で活発に用いられる「笑い」を表す表現に着目する。早川 (2000) は話し言葉を分析し「仲間づくりの笑い」「緊張緩和の笑い」「会話継続の笑い」という分類を提示した。話し言葉においては無意識的に産出される「笑い」が、書き言葉においては意識的に産出されるため、感情表現のメタ言語的知識について検討することが可能になる。

そこで本発表では、「話し言葉的」な書き言葉が用いられる「2ちゃんねる」「LINE」を対象に新規表現を採取し、早川 (2000) に基づき分析を行った。その結果、「2ちゃんねる」では「仲間づくりの笑い」、「LINE」では「緊張緩和の笑い」がよく見られたが、「会話継続の笑い」に関しては別のストラテジーが用いられていた。これは、それぞれの場の特性に起因すると考えられる。以上から、「感情表現」にもある種の規範が存在し、それが言語行為から立ち現れてくる点を論じる。

参考文献: [1] 早川 治子. 2000. 「相互好意としての『笑い』: 自・他の領域に着目して」『文学部紀要』14 (1): 23-43.

● 第5室 [東3号館 K301 教室]

Construction, Context, and Cognition: From Morpheme to Paragraph

オーガナイザー: LU Chiarung (National Taiwan University)

This workshop consists of four papers, aiming to discuss on the relations/interactions among construction, context, and cognition. Our targets cover a variety of linguistic units, ranging from morphemes, four character idioms, clauses, to paragraphs. The authors would like to present a dynamic account of discourse constructions and their realization.

1. The emerging construction of form of address in subculture: a comparative study LU Chiarung (National Taiwan University)

This paper explores the newly emerging strategy of politeness concerning forms of address in some online bulletin boards in Taiwan and Japan, arguing that pragmatic identity, i.e., identity-in-interaction, plays an important role in successful communication. The construction of pragmatic identity involves not only figurative speech, but also involves the understanding of context. That is why Dear GPA 4.3s can function as a polite form of address when seeking advice from a university bulletin board. In contrast to an impressive variety of forms of address found in Taiwanese boards, this strategy is less productive in Japanese data. The result may indicate an interesting cultural difference in the flexibility of maintaining and manipulating pragmatic identity in real discourse.

References: (1) Chen, Xinren, 2013. Pragmatic identity: dynamic choice and discursive construction. *Foreign Languages Research*, 4: 27-32. [in Chinese]. (2) Bargiela-Chiappini, Francesca, & Kádár, Dániel Z. (Eds.). 2011. *Politeness Across Cultures*. London: Palgrave Macmillan.

2. Construction, Context and Cognition: nak Constructions in Saisiyat YEH Mei-Li (National Tsing Hua University)

This paper deals with the pragmatic uses of nak 'be like' constructions in Saisiyat, a Formosan language spoken in the northern Taiwan mountainous areas. Unlike English like and French genre, which display many pragmatic functions (a focus marker, a hedge marker and a quotative marker, Fleischman and Yaguello 2004), the only pragmatic function of nak 'be like' seems to be that of

elaboration or clarification. The collocations of *nak* with different demonstratives yield different functions. For example, *nak hini* 'like this' is often exploited as an inferential marker by the speakers to conclude their narration. In contrast, the idiomatic expressions formed by collocating *nak* and the distal demonstratives 'isaza' and 'isa:a' display interaction function as backchannels. Depending on whether the speaker or the hearer is taken into consideration, contrasting functions are manifested by *nak 'isa:a'* – an attenuation function indicating speaker's uncertainty and a strengthening function showing assertion towards the hearer.

Selected Reference: (1) Fleischman, Suzanne and Marina Yaguello. 2004. Discourse markers across languages – Evidence from English and French. In Carol Lynn Moder and Aida Martinovic (eds.), *Discourse Across Languages and Cultures*, 129-147. John Benjamins Publishing Company.

3. Mandarin four-character idioms in everyday conversations

TSAI I-Ni (National Taiwan University)

Based on videotaped conversations in Mandarin Chinese, this study adopts conversation analytic approach to examine the sequences in which Mandarin four-character idioms is embedded in terms of turn design and sequence organization. This project attempts to address the following two questions: In what sequential environment, the use of four-character idioms is a feature of turn design? What interactional practices does the turn accomplish?

Initial observations show that three sequential environments stand out in the data. (1) Idioms regularly occur in the sequences where the speaker makes claims; idioms are used to frame the speaker's view about an issue. (2) Idioms also regularly occur in the sequences where the speaker makes complaints. The descriptive nature of the idioms helps to make extreme cases. (3) Some idioms are found to appear alone in a turn. In such context, idioms are mostly used as a sequence exit device.

References: (1) Drew, P. & Holt, E. 1988. Complaining matters: The use of idiomatic expressions in making complaints. *Social Problems* 35(4). (2) Drew, P. & Holt, E. 1998. Figures of speech: Figurative expressions and the management of topic transition in conversation. *Language in Society* 27.

4. Mandarin Chinese *fanzheng* 'anyway' as a reformulation marker in spoken discourse

WANG Yu-Fang (National Kaohsiung Normal University)

Mandarin Chinese *fanzheng* (反正) is an adverb compound occurring before or after a subject in a sentence, parallel to English *anyway*, *anyhow* or *in any case*. Previous studies (e.g. Lü 1980/2007) have noted that *fanzheng* is polysemous between causality and unconditionality; however, they have failed to give a unified account of how these functions are related. The present study is based on a data corpus of approximately 70 hours of recorded and transcribed, naturally occurring casual face-to-face interactions in Taiwan Mandarin. The data show that postposed *fanzheng* is very prevalent in the conversation data. In Q, *fanzheng* P, the postposed *fanzheng* weakens the status of the preceding proposition, which may be introduced by *buguan*, *bulun*, or *wulun* 'whatever the case/whether or not', the so-called markers of unconditionals.

5.

David TREANOR (Shih Chien University)

6.

LIN Meng-Ying (Research Institute for the Humanities and Social Sciences, Ministry of Science and Technology, Taiwan)

● 第6室 [東3号館 K302 教室]

境界を超える語用論のポテンシャル

オーガナイザー：名嶋義直（琉球大学）

語用論研究は、研究と社会の境界を超え、また今の社会の境界を超えて新しい社会へとつなぐ力を持っている。語用論研究者は、理論や知見を社会に提供してだけでなく、研究を通して社会問題を可視化し、その解決に取り組んでいく責務がある。本ワークショップでは4つの事例を紹介し、フロアと共に「境界を超える語用論」の可能性と社会的意義について、語用論研究者の「知識人」としての役割について考える。第一発表は高校野球テレビ実況中継のマルチモーダル談話分析である。ポジショニングのプロセスを解明し、境界線を越えるプロセスを明らかにする。第二発表は安倍首相の都議選街頭演説を分析し特定の発言をヘイトスピーチと分類し得る境界について考える。第三発表は語用論が研究の境界を超え日本語教育における実践にいかにかに寄与できるかについて実践例から論じる。第四発表は萌えキャラが「わたし」と社会とを媒介するということを論じる。

1. 横浜スタジアムから甲子園を目指す

永山友子（神奈川大学非常勤）

第99回全日本高等学校野球選手権大会神奈川県大会優勝校である横浜高校が戦った、準々決勝戦、準決勝戦、決勝戦テレビ実況のマルチモーダル談話分析を行い、横浜高校がポジショニングされていくプロセスを追う。ポジショニング(Davies and Harré, 1990; Waring, 2017; Wortham and Reyes, 2015)とは、「相互的に生み出されるストーリーラインにおいて、価値、性質、および社会的カテゴリーと関わりながら、自分自身や互いを位置づけるディスコースのプロセスである。」(発表者訳) (Waring, 2017:148)。アナウンサーが主体となり、試合をポジショニングするプロセスは、図らずも実況を行う自身のポジショニングにつながる。語用論は、その越境を可視化できる。

References: (1) Davies, Bronwyn and Harré, Rom .1990. "Positioning: the discursive production of selves" *Journal for the Theory of Social Behaviour* 20 (1) pp. 43-63. (2) Waring, Hansun Zhang .2017. *Discourse analysis: the questions discourse analysts ask and how they answer them*. Routledge. (3) Wortham, Stanton and Reyes, Angela .2015. *Discourse Analysis beyond the speech event*. Routledge.

2. 特定の発言をヘイトスピーチと分類し得る境界とは

佐藤桐子（首都大学東京院生）

本発表は差別的発言を悪意が向けられる対象の属性ではなく、発言そのものの内容と状況からヘイトスピーチに分類し得る可能性を検証した。法務省人権擁護局はヘイトスピーチを「特定の民族や国籍の人々を排除する差別的言動」と定義しているが、他の差別的言動とヘイトスピーチを分ける境界は民族や国籍だけなのか。検証のため毎日新聞記事『都議選街頭演説 安倍首相、秋葉原の激高かばう菅氏』(2017年7月3日)と動画を分析した。「こんな人たちに、皆さん、私たちは負けるわけにはいかない」という発言の「こんな」は属性を示す指示詞であり、岡部(1995)は強い否定的感情・評価をともなって使用されるとしている。山下(2016)はヘイトスピーチの特徴を「一方向的、相手とその場にいることが多い」等としている。これらの点から、当該発言は邦外出身者に対する発言ではないが、発言内容と状況からヘイトスピーチに分類し得ると考えられる。

参考文献：(1) 岡部寛. 1995. 「コンナ類とコウイウ類-ものの属性を表す指示詞-」. 宮島達夫・仁田義雄(編)『日本語類義表現の文法(下)複文・連文編』東京. くろしお出版. (2) 山下仁. 2016. 「ヘイトスピーチを「ことばの暴力」として考える：批判的社会言語学の観点からの一考察」. 『言語文化共同プロジェクト 2015』. 大阪大学大学院言語文化研究科. 3-15.

3. 日本語教育における語用論的实践

山森理恵（横浜国立大学非常勤）

語用論研究が研究の境界を超え、留学生を対象とした日本語教育の教育現場でいかに寄与できるかを実践例から論じる。実践例1では、東日本大震災で起きたこと、その後起きていることを題材に、語用論、特に関連性理論を援用し問題の指摘と解釈を促した。実践例2・3は、批判的談話研究の姿勢を参考に、批判的リテラシーを育むことをねらいとした活動である。実践例2では、実践例1と同じ授業の中で、受講生自身が自分の出身国や日本の大災害や大事故について調べ、問題点や解決方法を探った。実践例3は、「社会に関わる問題をテーマに調査発表する」という活動である。3つの実践例とも、内容をクラス全体で共有し、共に考え、意見を述べ合った。これらの実践例は、日本語教育においても語用論が寄与できることを示唆している。語用論の理論を援用することで、他者を理解する力、本質的な問題点を指摘する力、批判的リテラシーを育んでいくことが期待できる。参考文献：(1) スペルベル, D.・D. ウイルソン(著) 内田聖二 他(訳).1999.『関連性理論：伝達と認知(第2版)』.東京. 研究者出版. (2)東森勲・吉村あき子. 2003.『関連性理論の新展開』. 東京. 研究社. (3)ルート・ヴォダック/ミヒャエル・マイヤー(著) 野呂香代子(監訳). 2010.『批判的談話分析入門—クリティカル・ディスコース・アナリシスの方法』.東京. 三元社.

4. 萌えキャラが媒介する社会のジェンダー性

名嶋義直（琉球大学）

萌えキャラ公認撤回騒動を報じた新聞記事を分析したところ、「公の立場」の男性が「私の立場」の女性を支配し、自らの権力性を維持し再生産しようとする意図と実践が明らかになった。一連の騒動は、男性から見た女性像がキャラクター化されて世に出たとき、その過程に関与しなかった（または、できなかった、そこから排除された）女性が発した「権力による一方向的な支配に対抗する談話」をめぐるせめぎ合いであった。仮想世界の萌えキャラが「わたし」と「社会におけるジェンダー性の問題」とを媒介し、現実世界の中に潜んでいたジェンダーの問題を可視化した。萌えキャラは「わたし」と社会とを媒介する。

「わたし」の見方を社会に持ち込み、社会の見方を「わたし」に組み込み、双方を変えていく力を持っている。萌えキャラにおけるジェンダー性は、決して萌えキャラ自体の問題ではなく、社会に深く根ざした問題を投射しているという点で問題なのである。

参考文献：(1) 池田忍・山崎明子. 2014 「「人工知能」誌の表紙デザイン意見・議論に接して—視覚表象研究の視点から—」, 『人工知能』 29(2), 167-171. (2) 葛城浩一. 2008 「ジェンダー的要素はどう描写されてきたのか—「スーパー戦隊シリーズ」を事例として—」, 『こども社会研究』 14, 3-16.

基調講演 1 Plenary 1 (16:50~18:20) [60周年記念館 1階記念ホール]

Chair: HAYASHI Reiko (Konan Women's University)

● Experimental Methods in Cognitive Linguistic Critical Discourse Studies (CL-CDS)

Christopher HART (Lancaster University)

Critical Discourse Studies (CDS) is concerned with the strategies and structures presented by text and discourse in contexts of political communication and their power in legitimating social actions, identities and relations. A number of linguistic forms have been identified as especially significant, including transitivity structures, appraisal resources and metaphor. CDS, however, has been accused of over-interpreting the pragmatic functions of these forms. In this talk, I will argue that experimental methods can be usefully deployed in CDS to verify qualitative analyses and guard against over-interpretation. I present findings from recent experimental studies in CDS.



研究発表 2/ General Sessions 2 (9:30~11:25)

● 第1室 [東3号館 K101 教室]

司会：板倉ひろこ (Hong Kong Baptist University)

1. 言語形式の省略に生じる語用論的効果

稲吉真子 (北海道大学院生)

本発表では、「たり」や「も」など、複数の要素を列挙する際に用いられる言語形式を対象に、それらを単独で使用するにより生じる語用論的効果について検討する。Brown & Levinson(1978、1987)では、フェイスリスクにおける「配慮」と「効率」の関係から5段階のストラテジーが提案されているが、言語形式の省略は、意図する命題は伝達しつつも非明示的な部分に解釈の余地を残すことにより、フェイス侵害の度合いを軽減させていると考える。したがって、聞き手に対する配慮を保ちつつも、効率についてもそれほど低くはならない方略であると言える。これはヘッジの機能の内、属性を部分的なものにするという特徴に類似するが、本発表では、それには構造的な要因も大きく関与するという点について提案し、これについて具体例をもとに分析する。

参考文献：(1) Brown, P. and Levinson, S.C. 1987. *Politeness: Some universals in language usage*. Cambridge: Cambridge University Press. [田中典子監訳. 2011. 『ポライトネス—言語使用における、ある普遍現象—』東京：研究社]. (2) 滝浦真人. 2008. 『ポライトネス入門』東京：研究社.

2. いかにか初対面同士の会話を促進するか？ —同年代の日本人と韓国人の会話に見られるぼかし表現とフィラー表現の分析—

許明子（筑波大学）、永井絢子（筑波大学）

本研究では、日本国内の大学で学ぶ初対面同士の日本語母語話者と上級レベルの韓国人日本語学習者が日本や韓国の時事問題について意見を述べる場面を設定して会話調査を行った。初対面の両者が会話を促進させるために、いかにかぼかし表現とフィラー表現を有効に使用していたかに注目して分析を行った。その結果、両者は緊張を和らげると共に相手との距離感を調整するために、「たり」「とか」などのぼかし表現や、「えー」「あー」などのフィラー表現を効果的に使用しながら打ち解けた雰囲気でも話を進めていたことが分かった。本研究の分析結果は、日本人と外国人留学生の接触場面で、会話を成功に導くために言語的な調整が可能であることを示唆するものと言える。

参考文献：三牧陽子. 2013. 『ポライトネスの談話分析—初対面コミュニケーションの姿としくみ』、東京：くろしお出版.

3. スピーチ・レベルと上下親疎の関係 —断りの分析をもとにして—

ボイクマン総子（東京大学）、森一将（文教大学）

本研究の目的は、丁寧体の言い切りと丁寧体に終助詞などを伴う形、普通体と普通体に終助詞などを伴う形が、力関係（上下）と距離（親疎）のどちらかに影響を受けるのか、断りの発話の分析をもとに検証することである。データは、日本語母語話者（大学生）62名を対象に、上下親疎の異なる相手に対する11の断りの場面（対勧誘3場面、対依頼4場面、対提案4場面）のOral-DCTにより得た。それぞれの形式が会話者の上下親疎により、どのように使い分けられているか分析することで、そのスピーチ・レベルを明らかにする。

参考文献：(1) 三牧 陽子. 2013. 『ポライトネスの談話分析：初対面コミュニケーションの姿と仕組み』、くろしお出版.

● 第2室 [東3号館 K201 教室]

司会：西田光一（山口県立大学）

1. 付加疑問文をCDSで捉える—認知語用論的アプローチによる分析—

中谷博美（金沢大学）

本発表では、CDS (Current Discourse Space (Langacker 2012)) により、これまで十分に議論されてこなかった周縁的な例を含むすべての付加疑問文の意味機能と構造を統一的に示すことが可能であると提案する。CDSとは、ダイナミックな談話の展開とその背景にある認知プロセスを同時に捉える、いわば認知言語学と語用論の理論を統合させた枠組みである。具体的には、I do not want a repeat of what happened there, do you? のように、前置される平叙文の主語と加えられた疑問文の主語が一致しない例に説明を与える。このような照応関係が崩れている例には、Groundの一部である聞き手youや発話の場itが現れるケースが多い。それゆえ、概念化の主体の一部が客体化される intersubjectivity に関わっていると考えられる。CDSを用いた図式で、このような変化も捉えられる。

参考文献：(1) Langacker, Ronald W. (2012) “Interactive Cognition: Toward a unified account of structure, processing, and discourse.” *International Journal of Cognitive Linguistics* 3. 96-125. (2) Verhagen, Arie. (2005) *Constructions of Intersubjectivity: Discourse, Syntax, and Cognition*. Oxford University Press. Oxford.

2. I {think/believe} they won't win, will they? が認可されない語用論的理由について

森貞（国立福井工業高等専門学校）

本発表の目的は、I {think/believe} they won't win, will they?が認可されない一方で、I suppose they won't win, will they?（この場合の付加疑問は『聞き手に同意や確認を求める』機能を有する confirmation tag である）が認可される語用論的理由を明らかにすることである。通常、I {think/believe/suppose} p では、主節は、主張を緩和する epistemic marker として機能するが、音声データの比較を基に、I {think/believe} ¬p と I suppose¬p においては、前者のみに、【他者を意識した自己主張】の意識が生じていることを確認し、この意識が付加疑問との共起をブロックしていると主張する。さらに、従属節が否定文の場合に限り、このような違い（後者だけに epistemic marker としての機能が維持される）が見られる要因として、それぞれの表現における主節否定(MCN)と従属節否定(SCN)の出現割合の顕著な違いが関わっている可能性があることを示唆する。

参考文献：(1) Jackendoff, Ray S. (1971) "On Some Questionable Arguments about Quantifiers and Negation," Language 47, 282-297. (2) Vaneva, Marjana (2013) "Negative Transfer in English and in Macedonian Seen through the Translation Equivalents of These Two Languages," European Scientific Journal, vol.9, No.5, 115-124.

3. 現代日本語における「流れ」と事象構造メタファー

松浦光（横浜国立大学非常勤）

本発表は、事象構造メタファー(Lakoff,1993)の枠組みで、「男女が流れで付き合いってしまう」「周囲の流れに流される」など不本意性を持った「流れ」特有のメタファー表現を取り上げる。そして、元フレームと先フレームの写像関係(鍋島,2016)とフレームの構成要素(Sullivan,2013)に基づき考察を行い、次の3点を主張する。

- ①「流れ」の概念化には、<<活動は移動>>と<<状況は液体>>の双方が関与する。
- ②「流れ」に関するメタファー表現は、「川」の「流れ」の身体経験が基盤となっており、「流れ」を直接的に知覚すると捉えられる感覚主体、「流れ」について判断する観察者、という2つの視点に関わる。
- ③「流れ」のフレームの構成要素として「進行方向」が存在する。

これら进行分析することで、現代日本語の事象構造メタファーにおいて「流れ」自身が持つ性質によって、特有のメタファー表現が産出されることを示す。

参考文献：(1) Lakoff, G.1993."The contemporary theory of metaphor."In A. Ortony(ed.) .Metaphor and Thought.202-251. Cambridge. (2) 鍋島弘治朗.2016.『メタファーと身体性』.東京. (3) Sullivan, K.2013.Frames and constructions in metaphoric language. Amsterdam.

● 第3室 [東3号館 K202 教室]

司会：後藤リサ（関西外国語大学）

1. 「どうせ」のはたらき—「어차피（於此彼）」との対照を通して—

金谷由美子（大阪大学院生）

本発表では、「どうせ」のはたらきを、「どうせ P⇒Q」において動かない前提 P を聞き手にリマインドしつつ、その前提のもとで話者の考える最善の合理的選択肢 Q を述べることを示す談話標識であるとし、「どうせ」自体には否定的・肯定的等の多義は認められず、「どうせ」文が表わす話者の主観（態度・感情・評価）は、文脈によって説明されるべきであると考え。本発表では、これまで詳しく分析されていない「どうせ」文の語用論的

な意味表出のメカニズムについて詳細に記述することを目指すと共に、「どうせ」によく似たはたらきを持つ韓国語「어차피(於此彼)」との対照を試みる。「於此彼」は、選ばれなかった選択肢が想定として明確に存在しなければならないのに対して、「どうせ」は、Q以外の選択肢が想定上強く意識されないような場合でも、前提Pのもとで選ばれる帰結Qに自然な「根拠→選択肢」の流れがあれば使用できることを明らかにする。

参考文献: (1)菊地康人.2005.「『どうせ』の用法の分析」『日本学・敦煌学・漢文訓読の最新展開』汲古書院.(2)呉珠熙.2010.「『どうせ』の共起関係と文類型について-韓国語の副詞『어차피, 이왕이면』との対照を兼ねて-」『九州国際大学教養研究』17: 21-40.(3)武内道子.2015.『手続きの意味論—談話連結語の意味論と語用論』ひつじ書房.

2. 自己開示場面における「なんか」の使用—直接経験を導く働きに着目して—

杉崎美生（日本女子大学院生）

日本語会話でしばしば用いられる「なんか」は、従来、発話と発話の間を埋める働きを持つフィラーとして分析されてきた。しかしその一方で、なぜこの語が頻繁に使われるのかは未だ明らかではない。本発表では「びっくりしたこと」をテーマとした会話コーパスをデータとし、395例の「なんか」を抽出、共起する語や表現を観察し、文脈と共に分析を行うことで、その特徴を考察した。その結果、「なんか」は会話参加者が自らの出来事について語る自己開示場面に多く用いられ、心の中で感じた内容をセリフのように表現する心内発話と共に現れることが明らかになった。このような点から、相互行為において会話参加者の用いる「なんか」は、自身が経験した内容を、即興的に、また創造的に語ることに寄与していると考えられる。

3. 日常会話における否定表現の意味と談話機能に関する研究：発話冒頭の「いや」について

李嘉（名古屋大学院生）

先行研究において、否定表現「いや」は、感動詞の1つであり、否定用法と非否定用法があると指摘されている。しかし、先行研究の多くは、テキスト分析はメインであり、談話標識(Discourse Marker, 以下DM)としての「いや」の韻律特徴と談話機能両方に着目する研究は稀である。

本研究では、「名大会話コーパス」と筆者が収集した14時間の日本語日常会話録音データを分析資料として、「いや」を含む会話連鎖を抽出し、1.先行研究を踏まえ、相互行為の中のDMとしての「いや」の談話機能を分類した。2.Cresti (2012) の Language into Act Theory を踏まえ、異なる談話機能を持つ「いや」の韻律特徴を明らかにした。3.会話連鎖の中、「いや」で始まる発話の産出位置と条件、聞き手の反応をLeech(2014)の価値変化(Value Change)の概念を引用した上で、ポライトネス・ストラテジーの観点から考察を行った。その結果、話題開始、話題転換、質問、発話順番を取る、発話中自己修復のために使うDM「いや」とそれらの韻律特徴が見られた。

● 第4室 [東3号館 K203 教室]

司会：大塚生子（大阪工業大学）

1. 述部に見られる「機能」と「役割」—TVアニメにおける機能語の省略

尹盛熙（関西学院大学）

本研究の目的は、日本のテレビアニメーションの台詞における文末の述部がどのような形式をとるかを観察し、特に機能語が省略される様相について分析することである。述部における機能語は、実質的な意味内容は持たないものの、述語が形態的または意味的に完

全な形になるために必要とされることがある。日本語の機能語のうち、モダリティなどの文法形式、及びコピュラと形式動詞の用いられ方に焦点を当て、自然談話とは異なる話し言葉であるアニメの台詞で、機能語の省略がどのような役割を果たしているか、またどのような語用論的效果をもたらすかについて考察する。特にモダリティの終助詞は、役割語関連の分析で注目されており、様々なキャラクターの使い分けに用いられることが指摘されているが、あえて用いないことによって個性を持たせることもあり、機能語の省略が特定の人物像を印象付ける上で有効な装置として働いているものと考えられる。

参考文献：(1) メイナード, 泉子 K. 2004. 『談話言語学 日本語のディスコースを創造する構成・レトリック・ストラテジーの研究』くろしお出版. (2) 尹盛熙. 2016. 「日本語の翻訳字幕における省略・縮約の表現—韓国語との対照分析」. 『社会言語科学』18-2. 19-36.

2. 福音書における黙説の使用：Jesus を権威づけ、読者に語りかける

平川裕己（神戸市外国語大学院生）

本論は、消極的なレトリックとされる黙説 (aposiopesis) の表現効果を分析し、それがディスコース・ジャンルの特徴とも関わることを示す。考察の対象は福音書（『新約聖書』の最初の四書）である。

福音書の描写には特徴的な偏りがある。まず、教えを説く Jesus のことばに対する相手の反応が、肯定的なものに限られている。加えて、そもそも Jesus への反応が描かれないことも多い。こうした偏りのある描写方法は、レトリック研究で「黙説」と呼ばれる（佐藤, 1992: 24）。黙説の使用は、福音書においてどのような役割をもっているのだろう。

福音書の黙説は、ふたつの機能を果たす。まず、Jesus のことばへの肯定的な反応は、彼の教えを正しく権威あるものと意味づける。そして反応の不在は、読者に空白部分を埋めるよう働きかける。つまり福音書の描写は、読者を権威ある Jesus のことばにいわば「直に」触れさせるよう組み立てられているのだ。黙説というレトリックの使用は、こうして、福音書というディスコース・ジャンルのコミュニケーションのあり方を特徴づけている。

参考文献：(1) Lanham, R. A. 1991. A Handlist of Rhetorical Terms, 2nd ed. Berkeley; Los Angeles; London: University of California Press. ; (2) Perelman, C. and L. Olbrechts-Tyteca. 1969. The New Rhetoric: A Treatise on Argumentation. J. Wilkinson and P. Weaver (trans.) Notre Dame: University of Notre Dame Press. ; (3) 佐藤信夫. 1992. 『レトリック認識』 東京: 講談社.

3. 英語法副詞における機能の拡大—主語名詞と述語動詞との関連から—

鈴木大介（摂南大学）、藤原崇（同志社大学非常勤）

英語法副詞における機能の拡大—主語名詞と述語動詞との関連から—

鈴木大介（摂南大学）・藤原崇（同志社大学非常勤）

本稿では英語における法副詞の機能分析を主眼とし、コーパスデータの分析結果に基づいて、その機能と変化を議論する。具体的には、possibly, perhaps, maybe といった類義語の差異を比較しながら分析を進める。これらの副詞が示す蓋然性（可能性）は同程度であり、一般的には同じ意味範疇に分類されている。とりわけ、(i)主語位置に生起する名詞（句）と(ii)節の（述語）動詞（句）という二点について、それらの種類・パターンを記述しつつ、法副詞の機能との関連、さらには現代英語における変化を示す。

参考文献：(1) Greenbaum, Sidney. 1969. Studies in English Adverbial Usage. London: Longman. (2) Halliday, Michael A. K. 1970. Functional diversity in language as seen from a consideration of

modality and mood in English. *Foundations of Language* 6: 322–361. (3) Hoye, Leo. 1997. *Adverbs and Modality in English*. London: Longman.

● 第5室 [東3号館 K301 教室]

司会 : George O' NEAL (Niigata University)

1. A Corpus-Based Analysis of Independent Although Clauses in Spoken English Discourse
MIZUNO Yuko (National Institute of Technology, Asahikawa College)

A Corpus-Based Analysis of Independent Although Clauses in Spoken English Discourse
MIZUNO, Yuko (National Institute of Technology, Asahikawa College)

Although clauses sometimes occur independently without their main clause (e.g. Although, we do still lag behind nations). My aim is to describe what kind of discourse functions independent although clauses have in spoken English discourse. The data were collected from the Spoken section of the Corpus of Contemporary American English compiled from 1990 to 2011. My investigation of the data found that turn-initial independent although clauses can fulfill at least three discourse functions, i.e., Concessive, Self-correction, and Disagreement. The findings suggest that it is inadequate to characterize independent although clauses as subordinate clauses. Instead, I argue that turn-initial although which introduces an independent clause can be analyzed as a discourse marker. I also argue that we can consider the use of independent although clauses as a counterexample to one of the hypotheses of unidirectionality in grammaticalization processes, i.e., a cline of clause combining (Hopper and Traugott 1993).

References: (1) Higashiizumi, Y. 2006. *From Subordinate Clause to an Independent Clause*. Tokyo: Hituzi Syobo Publishing. (2) Hopper, P.J. and E.C. Traugott. 1993. *Grammaticalization*. Cambridge: Cambridge University Press. (3) Schiffrin, D. 1987. *Discourse Markers*. Cambridge: Cambridge University Press.

2. A Critical Discourse Study of Radio Interview Programs during the Occupation Period of Japan: Changes in How Runaway Girls Perceived the Realities of Social Inequality
OTA Nanako (Graduate student, University of Tokyo)

The present study is a Critical Discourse Study employing the Discourse-Historical Approach (Reisigl and Wodak 2015) and analyzes radio interview programs that were broadcast under the careful direction of the GHQ (General Headquarters) during the occupation period of Japan. Specifically, two programs, *Gaito Rokuon* (broadcast on April 15, 1947) and *Shakai No Mado* (broadcast on April 24, 1952), are analyzed by focusing on the words *yappari* and *shikata ga nai* in order to explore how the interviewer and the runaway girls together negotiated and described the harsh realities that the girls were exposed to. The present study may suggest the unique possibility of CDS within the fields of media and occupation studies by examining social problems during the occupation from the viewpoint of the socially-deviated girls, in contrast to the previous studies which tend to ignore their actual voices.

References: (1) Reisigl, M. and Wodak, R. 2015 (3rd edition). "The Discourse-Historical Approach." In Wodak, R. and Meyer, M. *Methods of Critical Discourse Studies*, 87-121. London: Sage Publications. (2) Maynard, S. K. 1993. *Discourse Modality: Subjectivity, Emotion and Voice in the Japanese Language*. Amsterdam and Philadelphia: John Benjamins Publishing.

3. 'I don' t know' as a Confrontational Discourse marker
KIM Serom (Graduate student, Kyunghee University, South Korea)

● 第 6 室 [東 3 号館 K302 教室]

司会 : IKE Saya (Sugiyama Jogakuen University)

1. On the semantics and pragmatics of utterance final particle ba in Mandarin
WANG Chiawei (Graduate student, University of Edinburgh)

This paper investigates the core property of utterance final particle ba and what leads speakers to choose between the ba variants, the high bā and low bā. In my findings, the particle ba signals a strong evidential meaning towards the proposition. Namely, it is less possible for the speaker to explicate an existing state or a possible outcome for having limited knowledge. Further, due to its property, the particle ba can be redundant when it collocates with interrogatives and exclamatories. Both the ba variants occur complementarily in declaratives and imperatives. The distribution of the particle is restricted to semantics, but pragmatics brings about communicative functions. Further, the core property of ba sticks to having a strong evidential meaning regardless of the occurrence of any kind of sentence types.

References: (1) Chappell, Hilary & Peyraube, Alain. 2015. Modality and mood in Sinitic. In Nuyts, Jan & van der Auwera, Johan (eds), *The Oxford handbook of modality and mood*. Oxford: Oxford University Press. (2) Chu, Chauncey C. 2009. Relevance and the discourse functions of Mandarin utterance-final modality particles. *Language and Linguistics Compass* 3(1), 282–299.

2. Gender Intensity and Stereotype of Naming Practice in Taiwan Mandarin Chinese
LIU Nien En (Graduate student, National Taiwan University)

Personal naming is highly essential to Taiwanese culture, because it highly affects personal images. However, few linguistic researches examine this topic. This study aims to investigate the relationship between gender and the semantic concepts in Taiwan Mandarin naming by analyzing different combinations of gendered and gender-neutral naming characters as well as their semantic meanings. The data is collected through the questionnaires which asked native speakers to identify the gender tendency in these names. The result shows that gendered and gender-neutral names can be placed in a continuum of gender tendency. Frame Semantics is used as theoretical framework to analyze semantic concepts of each naming character. Furthermore, the findings in this study are discussed using the concept of Frame (Lakoff, 2004) to illustrate the possibility of breaking down the frame of gender stereotypes shown in naming, and suggest the use of mix-gendered and gender-neutral names to reduce gender stereotypes. .

References: (1) Fillmore, C. J. (1976). Frame semantics and the nature of language. *Annals of the New York Academy of Sciences*, 280(1), 20-32. (2) Lakoff, G. (2004). *Don't think of an elephant! Know your values and frame the debate*. The essential guide for Progressives, including post-election updates. Chelsea Green Publish.

3. A Comparative Study of Refusal Strategies among Chinese Learners of Japanese and English: Is there an L2 Centered Pragmatic Competence?
CUI Haining (Graduate student, Tohoku University)

ポスター発表/ Poster Presentations (11:30~12:20)

ポスター発表会場 [60周年記念館 2階大セミナー室]

A1. 日本語とインドネシア語におけるあいづち行動の対照研究—非言語行動を中心にして—

リスダ・ヌルジャレカ (金沢大学院生)

あいづち研究の多くは言語化されたあいづち、つまり言語的あいづちに注目している。しかし、人間のコミュニケーションは基本的に対面で行われるので、言語表現だけでなく、非言語表現も重要な情報源となる。そのため、本研究では、大塚(2016)で提案された言語的・非言語的あいづち行動理論に基づいて考察する。日本語の会話をインドネシア語のそれと対照することで、両言語間の非言語的あいづちの特徴を明らかにする。具体的には、日本語では、非言語的あいづちは音声的あいづちと同時に出現する機会が多い。他方、インドネシア語の場合は、頷きのような非言語的あいづち行動が、音声的あいづちより多いということをデータに基づいて明らかにする。

参考文献：(1) 大塚容子. 2016. 「初対面の2人会話におけるあいづち行動—非言語行動を含めて—」『岐阜聖徳学園大学紀要』55, 外国語学部編 71-83. (2) 堀口純子. 1997. 『日本語教育と会話分析』くろしお出版.

A2. 母語話者による「～たい」「～ほしい」疑問文の使用実態

大政美南 (横浜国立大学院生)

「～たい」「～ほしい」疑問文使用に関する先行研究では、行為の種類や受益者は誰かといった観点から分析が行われてきた。本発表では発話の意図に注目し、日本語母語話者による「～たい」「～ほしい」疑問文の使用実態を明らかにしようと試みた。母語話者が発話をする際には、相手との関係、会話が行われる場面、話す内容だけでなく、どのような意図を持って当該発話をするのかという点も発話に使用される表現の選択に影響を与えると思われる。調査の結果、相手が目上であっても、親しみや卑下といった特別な意図を表したいときには、あえて「～たい」「～ほしい」を使用した疑問文が選択されることが分かった。また、話し手の年代や、日本語に関する知識の有無も「～たい」「～ほしい」疑問文の使用に影響を与えることが明らかになった。

参考文献：(1) 大石久実子. 1998. 「日本語の願望疑問文の使用制約——「～したい?」「～してほしい?」を中心とするアンケート調査をもとに——」『日本語と日本語教育』26, 13-36. (2) 奥野由紀子. 1998. 「日本語願望疑問文の習得に関する研究——願望疑問文適切性判断調査に基づいて——」『教育学研究紀要第2部』44, 398-403.

A3. get 受動態 — “modal” passive —

堀内夕子 (大阪キリスト教短期大学)

本発表の主眼は、安藤(2005)と江川(1991)の述べる「get+過去分詞」の使用の制限：a. 主語にとって好ましくない事柄が、突然・不意・偶然におきた b. 受動文の主語が、動作をうけることにより永続的な変化を生じる c. 受動文の主語は、動作をうける以前に存在していなければならない、のみでは説明できない現象があるとして2002年の講義内で加藤が口頭発表した仮説「受動主に対する話し手(情報の送り手)の感情の起伏が大きいときは無条件で「get+過去分詞」の形を使うことができる」ということが有効であるかどうかを考察することにする。本研究では Corpus of Contemporary American English を用いて調査を行った。「get+過去分詞」では不適切とされる達成目的語を取るような製作動詞の中から make, produce, create, construct, paint, write, build の7つを選び「get+過去分詞」を検索した。こうして得られた186例のデータをすべて観察し、受動主に対する話し手(情報の送り手)の感

情の起伏の有無を調べ、加藤(2002)の仮説は厳密ではないが有効であることを明らかにする。
参照文献: (1) 安藤貞夫. 2005. 『現代英文法講義』、東京：開拓社。(2) Biber, D., S. Johansson, G. Leech, S. Conrad and E. Finegan (1999) Longman Grammar of Spoken and Written English, London: Longman. (3) 江川泰一郎 (1991) 『英文法解説 改定三版』東京：金子書房。

A4. Countability Matters? A Cognitive Approach to Investigating Fillers in the “From X To Y Construction” in English

CHUANG Huichun (Graduate student, National Taiwan University)

“From X to Y” is a construction commonly used to describe a path such as from Tokyo to Kyoto. In addition to the sense of complete path aforementioned, this paper argues that the construction can trigger off categorical interoperability between type and instance in modern English (e.g., from man to woman vs from a man to a woman). Moreover, the construction appears to also prompt its fillers to behave similarly in other parts of speech (i.e., adjectives, adverbs, and even prepositions). That is, the “from X to Y” alignment can be seen as a productive construction that induces interoperability between different lexical categories. This study employs a cognitive approach, seeking to provide a usage-based explanation by deriving its corpus solely from COCA and BNC in hopes not only of faithfully reflecting today’s real-world language use, but of making contributions to the L2 education of English.

References: (1) Cruse, D. A. 2000. Meaning in language: An introduction to semantics and pragmatics. Oxford: Oxford Univ. Press. (2) Garai, Koldo J. and Iraide Ibarretxe-Antuñano. 2002. “From X to Y: The ‘complete path’ construction in Basque”. Odense Working Papers in Language and Communication 23: 289-311. (3) Goldberg, A. E. 2007. Constructions: A construction grammar approach to argument structure. Chicago: Univ. of Chicago Press. (4) Ibarretxe-Antuñano, Iraide. 2002. ‘Motion events in Basque narratives’. In Sven Strömquist and Ludo Verhoeven (eds.) Relating events in narratives: Typological and contextual perspectives. Lawrence Erlbaum. (5) Langacker, R. W. 2008. Cognitive grammar: A basic introduction. New York: Oxford Univ. Press.

A5. Pro-Liberal or Not: A Cognitive Analysis on Anti-Trump’s Political Protests

CHEN Alexander WH (Graduate student, National Taiwan University)

This study investigates the cognitive conceptualization of construal in conflicts that is elicited from the online news reports, namely, Fox News, CNN, ABC, and Wall Street Journal news of the twelve recent anti-Trump political protests through an analysis of Langacker’s model of Cognitive Grammar (CG), in a hope of merging the Cognitive Linguistic (CL) with Critical Discourse Analysis (CDA). The results suggest that while we have discovered both similarities and differences in the conceptualizations of conflicts from the online new reports of anti-Trump political protests, there are also important variations between the representation of grammar and construal activities which seem to be paradoxical to their liberal versus conservative stance respectively.

References: (1) Langacker, R. (2008). Cognitive Grammar: A Basic Introduction. Oxford: Oxford University Press. (2) Chilton, P. (2004). Analysing Political Discourse: Theory and Practice. London: Routledge.

A6. 語彙項目の言語変化に関する基礎研究：2010年「流行語大賞」を例に

林智昭（近畿大学非常勤）

Hopper and Traugott (2003: 107) によれば、名詞・動詞という語彙的に「開かれた」項目と、前置詞・接続詞・助動詞等の「閉じた」項目がある。語彙項目の変化は、文法変化と比べて急速である (Leech et al. 2009)。本研究では、語彙項目における変化の一例として流行語を取り上げ、発生から定着に至るまでの同時代における変化を観察する。具体的には、2010年当時の社会情勢を示す言語事例としてユーキャン「流行語大賞」候補にノミネートされた10例から以下を分析対象とする: (i) 東京スカイツリー、(ii) AKB48 と関連グループ名、

(iii) twitter の時制表現。流行語は、世相を大きく反映したと社会的に認定されたものと考えられ、その記述は、当時の「生きた」言語を後世へ伝える史料となる。言葉の誕生と波及を、当時の社会の関わりから検討する。

参考文献：(1) Hopper, P. J. and Traugott E. C. 2003. *Grammaticalization* (2nd Edition). Cambridge: Cambridge University Press. (2) Leech, G., M. Hundt, C. Mair and N. Smith. 2009. *Change in Contemporary English: A Grammatical Study*. Cambridge: Cambridge University Press.

A7. Sensitivity to pragmatic markers predicts the degree of autism and depression in older adults: Evidence from sentence-final expressions in Japanese

KIYAMA Sachiko (Tohoku University), KOIZUMI Masatoshi (Tohoku University), YUSA Noriaki (Miyagi Gakuin Women's University)

Autistic traits are prevalent not just in younger generations but also in older generations, and can potentially lead to older adults' depression (Lever & Geurts, 2016). To examine the effects of aging and autistic traits on the perception of linguistic expressions indicating interpersonal distance, we conducted a survey of how older adults evaluated combined uses of Japanese addressee-honorifics and sentence-final particles (SFPs) in younger adults' utterances. Results revealed that both depression and autism significantly influence older native speakers' pleasantness judgment of younger counterparts' utterances depending on honorifics *-te kudasai* and SFP *-ne*. This tendency for SFPs was particularly true of older men, not older women, with higher traits of depression and autism. The result presents the first evidence that autistic traits as well as depression in older adults contribute to reduced sensitivity to linguistic markers encoding social distance, which can result in their social isolation.

Reference: Lever, A., G., & Geurts, H. M. (2016). Psychiatric co-occurring symptoms and disorders in young, middle-aged, and older adults with autism spectrum disorder. *Journal of Autism and Developmental Disorders*, 46, 1916-1930.

A8. ロバ文解釈における語用論の影響：動的意味論と語用論の関係を探る

天本貴之（慶応義塾大学院生）、高谷遼平（慶応義塾大学院生／日本学術振興会）

本発表は、いわゆるロバ文(Donkey Sentence)における不定名詞句と代名詞の照応関係について、動的意味論の分析においても語用論的な推論規則が必要になると主張する。これまでの研究において、ロバ文にはいくつかの読みが存在することが指摘されている(kanazawa 1994, Brasoveanu 2007)。しかし、ロバ文の解釈に動機づけられて提案されてきた動的意味論の枠組み（談話表示理論や動的述語論理）では、ロバ文のすべての読みを導出することができない。そこで本発表では、ロバ文の解釈には動的意味論を補完する語用論的規則が必要になると論じる。語用論的規則が動的意味論と切り離されて用いられるのではなくその内部に位置づけられる点で、意味論と語用論が相互に関係しながら最も自然な解釈を導出することが可能となる。

参考文献：(1) Kanazawa, M. 1994. "Weak vs Strong Readings of Donkey Sentences and Monotonicity Inference in a Dynamic Setting." *Linguistics and Philosophy* 17, 109-158. (2) Brasoveanu, A. 2007. "Structured Nominal and Modal Reference." Ph.D. dissertation. Rutgers University, New Brunswick, NJ.

A9. Promises, Lies, and Bullshit: Speaker Intent in Linguistic Interaction

Chad NILEP (Nagoya University)

A10. 程度副詞の「ちょっと」の意味解釈に関する音声的要因について

呂妍（早稲田大学院生）

程度修飾の「ちょっと」の意味解釈には本義の場合と本義でない場合とがある。本研究は「このケーキはちょっとおいしいよ」のような「ちょっと」の程度修飾をめぐって、文脈との関わり及び音声的要因の相関から考察した。その結果、音声的には、「ちょっと」の無音期間の延長や「ちょっと（高→低）」「ちょっと（低→高→低）」のピッチの変化などが「普通か普通以上である程度・量」という解釈を誘発することがわかった。ただし、比較の文脈など、音声的要因の如何に関わらず、本義の「少量・低程度」で解釈される場合もある。

参考文献：(1)岡本佐智子・斎藤シゲミ．2004．「日本語副詞「ちょっと」における多義性と機能」．『北海道文教大学論集』5：62-75．(2)彭飛．1990．『外国人を悩ませる日本人の言語習慣に関する研究』．和泉書院．(3)Sperber, D and Wilson, D. 1995. *Relevance: Communication and Cognition*. Cambridge.

A11. 日本語名詞句の形式特性が文解釈に及ぼす効果について

中井延美（明海大学）

本発表では、「本」「子ども」「学校」のような形式そのものに不可視的に付随する働きがあるとする中井（2013, 2017）を概観したのち、日本語名詞句を形式上「素名詞句」と「非素名詞句」に区別すること自体が、文解釈を一定の方向に導いている可能性を示す。非素名詞句（「本件」「東京」「彼女」「それ」「学生たち」「この本」「例の本」「とある本」「3冊の本」など）は、素名詞句（「本」「子ども」「学校」など）と違って、概念的な意味以外に付加的な情報を含んでいるため、話し手は、発話の意図を確実に伝えるために非素名詞句を使うことが不可欠である状況においては、素名詞句でなく、非素名詞句をあえて使う傾向がある。一方、素名詞句は、非素名詞句に比べると情報が基本的に概念的な意味に限られてしまうが、それは中立的な意味であることにもなるため、より広い範囲の解釈を可能にする傾向がある。

参考文献：(1) Nakai, Nobumi. 2017. "Formal features and interpretation of noun phrases", oral presentation (lecture), 15th International Pragmatics Conference (Belfast). (2) 中井延美. 2013. 「日本語と英語における定表現・不定表現の具現形式について」、『英語文化研究』、274-284、日本英語文化学会.

基調講演/Plenary Lecture 2(12:50~14:20)

[60周年記念館1階記念ホール]

Chair: SHIINA Michi (Hosei University)

● Historical Pragmatics: The Case of Early Modern English Negatives

Jonathan CULPEPER (Lancaster University)

I open this talk by describing and illustrating the various strands of work that comprise historical pragmatics. I point out similarities and differences between synchronic and diachronic variation. Turning to method, I discuss the very recent and rapid rise of corpus pragmatics, a method that has been central to historical pragmatics for years. In the second half of the paper, I conduct a pragmalinguistic case study, namely, the investigation of early modern English negatives. In order to contextualise negatives, I first outline early modern affirmatives, including *yes* and *yea*, drawing upon Culpeper (forthcoming). I then turn to two key early modern negatives, namely, *no* and *nay*. I will use corpus methods to examine their contexts of use. I will also consider multiple negation. Throughout this talk I will endeavour to connect with issues of general concern in pragmatic studies.



東アジア特別国際シンポジウム/ Symposium (14:30~16:30)

[60周年記念館1階記念ホール]

● East Asian Special International Symposium: Pragmatics in East Asia: Its practice and contribution

Chair: KITANO, Hiroaki (Aichi University of Education)

Discussant: Jonathan CULPEPER (Lancaster University)

Pragmatics can be broadly defined as the study of language in use. Underlying this definition is an assumption that language is integral part of context. We may go a step further to argue that language is a function of context, that is, context shapes the form and determines the meaning of language. Within this view, which is called the ‘perspective view’ of pragmatics, pragmatics offers cognitive, social and cultural perspective on linguistic phenomena at any level /or unit of linguistic structure for any type of form-meaning relationship. One of the central concerns in this vein of pragmatics is the question of how language adapts to the communicative need of the context. The purpose of this international symposium is to discuss how the pragmatic analysis of context-dependent linguistics phenomena can contribute to the study of language, on the one hand, and how it contributes to the understanding of its cognitive, social and cultural context, on the other. Speakers from the three countries in East Asia will discuss this fundamental problem through their own studies to seek how we can work together and regionally contribute to the further understanding of the relationship of form, meaning and context.

◆ Subjectification of the English Booster *awfully*: A Corpus-Based Study

ZHAN Quanwang (Anhui University)

Based on English Literature Corpus, this paper makes a diachronic study of the semantic change of the English booster *awfully*. The results show that the semantic change of *awfully* is a process of subjectification; the process consists of three stages – the initial stage (1759-1818), the transitional stage (1819-1870) and the subjectification stage (1871-); subjectification of *awfully* is embodied in four shifts – from a propositional function to a discourse function, from an objective meaning to a subjective meaning, from a sentence subject to a speaker subject, from a free form to a fixed form; the fundamental mechanism of subjectification of *awfully* is repetition.



References:(1) Carey, K. 1995. "Subjectification and the development of the English perfect." In D. Stein and S. Wright, eds., *Subjectivity and Subjectivisation*. Cambridge: Cambridge University Press. Pp. 83-102.(2) Berg, R. Dirven and Panther, K.-U., eds., *Motivation in Language: Studies in Honor of Günter Radden*. Amsterdam/Philadelphia: John Benjamins.

◆ The Structures, Meanings and Functions of Conditional Clauses in Spoken and Written Chinese Discourse

WANG Yu-fang (National Kaohsiung Normal University)

The study reported in 2017 PSJ attempts to explore the functions of the four types of Chinese conditionals (i.e. factual, probable, improbable, and counterfactual) across two discourse modes: daily conversation and news reportage articles, which occur in informal and formal speech situations separately. In particular, it examines what are the various types of conditional clauses in relation to the initial and final positions with respect to their matrix clause, frequently occurring in spoken and written discourse. The spoken corpus came from naturally occurring two-party or multi-party conversations, totaling 90 hours 37 minutes 25 seconds; the written corpus came from UDNDATA, a newspaper database of the United Daily News group in Taiwan, from Sep. 1, 2012 to Sep. 7, 2016. It is well recognized that English makes grammatical distinctions among the different types of conditionals in the auxiliary verbs and tense and aspect markers they can or must take, but Mandarin Chinese has no such grammatical distinctions. The result shows that different Chinese conditional markers are used by the speaker/writer as signposts to guide the hearer/reader into an imaginary world between factuality and counterfactuality.



References: (1) Haiman, John 1978. Conditionals are topics. *Language* 54, 564-589. (2) Akatsuka, Noriko. 1985. Conditionals and the epistemic scale. *Language*, 61(3): 625-639.

◆ Grammaticalization and Pragmatic Inference: The Case of Insubordination

RHEE Seongha (Hankuk University of Foreign Studies)

Mechanisms operating in grammaticalization of linguistic forms are many and varied, but pragmatic inference is among the most prominent forces that enable linguistic forms to acquire grammatical functions. For its strategic nature, it is present in nearly all instances of interactional discourse while linguistic forms are constantly subjected to meaning negotiation. ‘Insubordination’ (Evans 2007, Evans & Watanabe 2016), or main clause ellipsis, is an example par excellence which exhibits the significant role of pragmatic inference. Speakers often employ insubordination for the benefit of locutionary economy and information enrichment. When the main clause is thus elided, the addressee actively attempts to construct it relying on the given textual and situational contexts, and the diverse relationships between the given information and the hypothesized unspoken information become semanticized on the subordinator. This paper illustrates the elegant workings of such pragmatic inferences in grammaticalization based on the data in Korean.



Evans, Nicholas. 2007. Insubordination and its uses. In: Irina Nikolaeva (ed.), *Finiteness: Theoretical and Empirical Foundations*, 366-431. Oxford: OUP.

Evans, Nicholas, & Honoré Watanabe (eds.). 2016. *Insubordination*. Amsterdam: Benjamins.